



筑波大学
University of Tsukuba

Tsukuba Communications

vol.10

2 新春特別対談

「ノーベル賞受賞者が見る日本の科学技術と教育」
白川 英樹氏 × 山田 信博 学長

筑波大学名誉教授
ノーベル化学賞受賞者

8 特集 「男女共同参画」

10 学内組織紹介 生命領域学際研究センター

12 附属学校紹介 附属聴覚特別支援学校

14 TSUKUBA SPORTS 陸上競技部

16 TSUKUBA ART & CULTURE 環境サークルエコレンジャー

18 TOPICS イベント／交流／受賞

24 羽ばたくOB&OG

麓 幸子氏
日経WOMAN 編集長

26 リレーエッセイ

28 茗溪会Letter

29 紫峰会Letter

30 新聞掲載・テレビ放送一覧

31 イベントカレンダー



新春特別対談

「ノーベル賞受賞者が見る 日本の科学技術と教育」

白川 英樹 氏 筑波大学名誉教授
ノーベル化学賞受賞者 × 山田 信博 学長

自然の中で暮らすことで 科学への興味を感じた

山田 新年、明けましておめでとうございます。

今回は、ノーベル化学賞受賞者で、本学の名誉教授でもある白川英樹先生をお招きしました。筑波大学への思いや研究について、そして本学の学生たちが元気の出るようなお話をお聞かせいただきたいと思います。

白川 明けまして、おめでとうございます。

去年は、根岸英一パデュー大学特別教授と鈴木章北海道大学名誉教授がノーベル化学賞を受賞されました。私が2000年にノーベル化学賞を受賞後、5人の日本人が受賞されたことを大変誇りに思っています。筑波大学関係者の活躍も新聞などで拝見しておりますし、講演などで「筑波大学の卒業です」という方々にお会いすると、やっぱり嬉しいものですね。

山田 白川先生がノーベル賞を受賞した研究ですが、プラスチックは電気を通さないという従来の常識を覆し、高分子化学に先例のない「導電性高分子」という新しい領域を開拓されました。いわゆる「電気を通すプラスチックの発見」ですが、先生が化学や研究テーマに関心を持たれたのはいつ頃からでしょうか。

白川 生まれは東京ですが、父親が軍医でしたので、3歳頃からは台湾に渡り、日本に戻ってきては、満州に渡ったりという生活でした。まだ小学生に上がる前で台湾にいた時、すごく大きな台風がありました。近所で大木が根こそぎ倒れ、そこに開いた大きな穴から、ものすごい数のセミの幼虫が這い上がってきて、それが面白かった。他にも、夜中に両親に連れられてホテルを見に行ったこととか、幼いころから自然への関心が強かったように思います。小学3年生から高校を卒業するまでの10年間は、岐阜県の飛騨高山で過ごしました。自然に恵まれた環境の中で、昆虫や草花の採集をするなど、野山を駆けまわっているうちに、自然に「生物学って面白い」

と思うようになりました。化学に対する興味が出てきたのもちょうどその頃ですね。高校生の時には、大学に進学して生物学か物理学、そして化学のどれかを勉強したいという気持ちになっていました。

山田 生物や物理にも興味があったのに、化学を選んだのはなぜですか。

白川 中学時代は毎日、母が作ってくれた弁当をポリ塩化ビニールの袋に入れて持っていったのですが、朝、熱い弁当を包むとビニールが伸びてしまい、昼になって弁当箱がさめると今度は弁当箱の形になって固まってしまう。そのビニール袋は、次からは使いづらくなってしまうんです。このプラスチックの弱点に気が付いた時に、すごく興味がわきました。それで、新しい素材を使って開発するような仕事をしてみたいという思いが強くなっていきました。私が東京工業大学（東工大）に入学した当時は、高分子の研究をされている先生が多くいらっしまったので、化学工学の学科に進んだのです。

ノーベル賞を受賞した 「導電性高分子」の研究

山田 学生時代に、高分子研究で具体的に研究したいテーマはあったのですか。

白川 「今までにない高分子を作りたい」という気持ちはありません。具体的に研究が深まったのは、助手になってからです。大学院を修了する時に、助手のポストが空いて、私は東工大に残ることができました。高分子を合成する際に、原料となるモノマー（単量体。ポリアセチレンに対するアセチレンを指す）から、ポリマー（重合体）に変化する触媒の反応機構を明らかにしなくてはなりません。最初はこの「重合機構」の研究に没頭していました。ある時、韓国人研究者が、私の所属する講座に滞在することがあり、ポリアセチレンの合成に興味を抱きました。そこでこの研究者に、実験器具や使い方を簡単にレクチャーして実験を任せていたんです。すると、「先生、重合しません」と言うんです。そんなはずはないと思い、見に行くと、確かに重合していない。そこには、実験器具の中に黒い膜のようなものができていました。その膜を見て、不思議なことが起こるものだと思います。当時、すでにポリアセチレンは知られていましたが、粉状にしかならないために、うまく測定ができなかったんです。ところが、目の前に真っ黒い膜ができていて固形化されている。これはもしかしてポリアセチレンが膜状になっているのではないかと調べてみたところ、その通りで間違いなかったのです。



山田 失敗から、新たな発見があったのですね。

白川 ところが。どうして膜状になったのかは、よく分からなかったのです。今でも、本当の理由は分からないんですよ。ただ、触媒溶液の濃度を1000倍くらい高めることで、膜状になるということが解明できた。さらに注意深く検証することで、徐々に金属のアルミ箔と同じような光沢ある膜を作れるようになりました。そのポリアセチレンの膜をいろいろ調べていくと、2〜3年であっさり、当初の目的であった「重合機構」が分かったんです。同時に、ピカピカと光沢を放つ金属のような外見の膜は、どうも伝導性のメカニズムを持った物質であることが見えてきました。ただ、残念ながらその時は電気を通すことはできず、そのため、この研究発表は、当時はそれほど話題になりませんでした。私はその後、ポリアセチレンの研究から少し離れていきました。



やま だ のぶ ひろ
山田 信博学長

1951年	東京生まれ
1976年	東京大学医学部医学科卒業
1986年	〃 附属病院助手
1994年	〃 講師
1995年	〃 助教授
1999年	筑波大学臨床医学系教授
2007年	〃 理事・附属病院長
2009年	〃 学長就任

山田 注目されないまま、研究が埋没するところだったのですね。

白川 10年ほど別の研究に打ち込んでいましたが、もう一度、ポリアセチレンの研究に戻ってみたいと考えていた頃、1975年に、東工大にアメリカの研究者のアラン・マクダイアミッド博士が講演に来ました。マクダイアミッド博士は、無機化学の専門家だったのですが、物理学の専門家であるアラン・ヒーガー博士と、無機の高分子の共同研究をされていました。ですから、金属の光沢を持つ金属以外の物質に興味を持っていて、講演後に「日本の研究者の中で、光輝くプラスチックを作っている研究者がいる」という話を聞いて、ぜひ見せてほしいと頼られました。実際にポリアセチレンのフィルムを見せたところ、飛び上がるほど驚いて興奮しましたね。すぐに「アメリカで一緒に共同研究をしよう」と持ちかけられました。マクダイアミッド博士は無機化学の専門家で、私は高分子の有機化学を専門としている。さらに物理の専門家がいて、専門分野の違う3人で共同研究しようという話でした。もともと大学院生のころから欧米留学してみたいと思っていましたから、私にはとても魅力的な話でした。それがきっかけになって、米国に渡りペンシルベニア大学で共同研究することになったんです。

山田 渡米は、白川先生40歳の頃ですね。

白川 マクダイアミッド博士とヒーガー博士の共同研究基盤の上に参加しましたから、非常にスムーズに共同研究に入れる環境でした。実際に、金属光沢のポリエスチレンの膜を作ってみせると、誰もがとても驚きましたね。おかげで、この研究に興味を持ってくれる人がたくさんいましたから、研究スタッフも充実していました。それに、個性や専門分野が異なる3人のバランスがうまくみ合ったのでしょう。研究を進めると割とすぐに、「ドーピング」が鍵になることが分かってきたんです。ポリアセチレンに少しの不純物(臭素)を加えることで、電気が通る可能性があると考えたのです。実験してみると、いきなり10桁近くまで数値が上がりました。物理量が2倍程度ならいざ知らず、10桁も上がるなんて考えてもいませんでしたから、「電気が通った!」と、みんなとても興奮しましたよ。それから研究を重ねて、「導電性高分子」のさまざまな現象を発見することができました。それで1977年、ニューヨークで開かれた科学アカデミーで、この研究を発表しました。当時は、「プラスチックは電気を通さない」というのが常識でしたから、この発表はとても高い関心を集めました。これが、2000年にマクダイアミッド博士とヒーガー博士、そして私の3人でノーベル化学賞を受賞することになった、「導電性ポリマーの発見と開発」です。

私たちの生活で活用されている 「電気を通すプラスチック」

山田 これによって「導電性高分子」という化学分野が開かれていったわけですが、一般の日常生活には、どのように生かされているのでしょうか。

白川 電気を通すプラスチックを作る過程で起こった応用的なものは、現在、世界中で活用されています。一番活用されているのは、リチウムイオン電池。皆さんが持っている携帯電話やデジタルカメラのバッテリーです。小さいものですが、電子機器になくはならない電解コンデンサーもそうです。これらを利用することで、あらゆる電子機器が飛躍的に小型・軽量化して、性能を高めることに役立ちました。今後も、あらゆる分野で幅広く活用することが考えられます。

山田 その後、白川先生は日本に帰って来られました。

白川 研究が一定の形になりましたので、3人の共同研究は一区切りとし、それぞれの専門的研究に戻りました。私は、共同研究の中でドーピングによる変化の発見がありましたので、物理学のアプローチではなく、高分子学者から見たドーピングの研究をしてみたかったのです。共同研究が終われば日本で研究した方がいいと考えて、1年で帰国しました。その後、東工大で研究を進めている時に、筑波大学に声をかけていただきました。

山田 白川先生は、1979年に助教授として本学に来られて、1982年に物質工学の教授、2000年に名誉教授になるとともに本学を退官されるまで、約20年間、筑波大学に務められました。そして同年、「導電性ポリマーの発見と開発」でノーベル賞を受賞されたのですね。

履歴書の“空白”の中で得られた 経験が学生にとって大切

山田 学生時代から留学願望があったとお話がありましたが、昔は、チャンスがあれば海外に出たいという人が当たり前のように多かった。ところが、今の若い人たちは海外に行きたがらない傾向にあると言われています。

白川 若者たちは、わざわざ海外で生活しなくても、日本にいれば何とかなると考えるようになったのが、一番の大きな原因だと思います。私が留学を考えていたのは、海外での生活や研究の中での経験を得たいと思ったからです。日本以外の環境で得られる経験は大きいと思いますし、私は海外留学の機会を少しもためらいませんでした。ただ、多くの人にとって、帰国後の土台が、きちんと作られているかということが、海外に出るための

動機づけに大きな影響があるのではないのでしょうか。海外に行っても帰る場所がないのは、心配ですね。

山田 今の日本の学生には、海外に出て長期滞在する余裕がないように思います。長い不況で卒業後の就職状況が悪化しています。早い学生だと2年生の後半から動き出しますが、3年生にもなるとほとんどが就職活動に入っていきます。大学に入って2年間は基礎的な学問をして、これから専門的な経験や、大学時代にしか得られないようなさまざまな経験をする余裕が、今の学生には少なすぎると思います。昨今は、留学すると就職に不利になるという話も出てきています。

白川 「シュウカツ」なんて言葉が定着化していますが、3年生頃から就職活動をしなくてはならないなんて、以前は考えもしませんでした。大学や教育機関だけで解決できる問題ではなく、日本社会全体で解決する



しらかわ ひで き
白川 英樹氏 筑波大学名誉教授・ノーベル化学賞受賞者

1936年	東京生まれ
1961年	東京工業大学理工学部化学工学科(現・工学部化学工学科)卒業
1966年	// 大学院理工学部研究科博士課程化学工学専攻科修了、資源化学研究所助手
1976年	米国ペンシルベニア大学博士研究員
1979年	筑波大学助教授
1982年	// 教授
1991年	// 大学院理工学研究科長(～1993年3月)
1994年	// 第三学群長(～1997年3月)
2000年	ノーベル化学賞受賞 文化功労者 文化勲章受章
2001年	日本学士院会員

問題です。

山田 今年度になって大学側(就職問題懇談会)から企業側(日本経済団体連合会)に対して、「卒業・修了後3年間は新卒者として扱う」という申し入れを行いました。個人的には、3年というのも中途半端な気がしていますが、こうした働きかけも重要になっています。

白川 学生は履歴書の中に堂々と留学経験を書き、企業もその留学経験に価値を見出すようにならないと、内向きの学生が増えるのは仕方のないことです。履歴書が大事だと言いますが、そこに書かれている文字と文字の間にある「空白」の中で、学生たちが得た経験を無視してはいけないと思います。



研究者一人一人が科学技術の 大切さを外に発信する

山田 筑波大学での研究生生活はいかがでしたか。

白川 筑波大学は、私にはとても居心地が良いものでした。学際交流が豊かであるというのは、研究者にとってはありがたいことです。特に私は、アメリカでそういう経験をした後でしたからなおさらで、研究をしていて物理のことで分からないことがあれば、すぐに物理学の先生に話を聞かせていただいたなんてことが、よくありました。教育研究科や地域研究科などは、文系や理系の学生が両方入っていて、学際性が非常にうまく機能していたと思います。そうした学際交流の面で、現在は少しずつ薄れているんじゃないかという危惧を抱いています。

山田 社会のニーズも変化し、専門科目が細分化したり、新しい学域が生まれていくなかで、筑波大学の創立理念をもう一度大切にすべきだと考えています。ご指摘の通り、各組織が小さくまとまってしまうがちなのですが、もっと大きな視野で交流できるように、このたび、「教育研究体制の在り方検討委員会」から中間報告が出され、学内で活発に議論を広げているところです。

白川 学生について言うと、私がいた頃から筑波大学は留学生が多かったのですが、多くの留学生を受け入れることができるのは、留学生たちの生活環境が、きちんと整っているということなのだと思います。

山田 現在、筑波大学は、留学生の受け入れ数が、全国の国立大学で2番目に多い大学となっています。

白川 留学生たちと日本の学生たちの交流が、さらに活発になるような環境や場所を作っていくことで、日本の学生たちにも、研究面や生活面でも刺激になっ

て、もっと外国への関心も高まっていくと思います。

山田 確かに留学生の話を見ると、日本の学生との間に距離や壁といったハードルがあるようです。語学の問題もありますが、このようなハードルを取り除いていくことも、重要ですね。大学外の要因としては、現在、科学・教育関連の予算が削減されていることです。

白川 私が現役の研究者だった頃から、科学・教育関連の予算は厳しい状況にありました。政府も国も、ムードとしては科学・教育予算は大切だということになるのだけれど、どこから予算が出るのかということになると、話が進まなくなる。私も、文部科学大臣や財務大臣などに会って交渉してきましたが、なかなか前進しなかった経験があります。それで結局は、納税者である国民に訴えていくしかないと思うようになりました。これから教育を受ける子どもたちに科学の面白さを伝えていくよう、積極的に働きかけていく。それから、納税者である社会人たちに、科学技術の大切さを訴えていく場所へ積極的に出て行く。私は元科学者という立場で、子どもたちの実験セミナーや講演会活動などに、よく出るようにしているのですが、現役の研究者たちは研究室に閉じこもってばかりいないで、そういう場所に出て行く

ことが大切になってくると思います。科学・教育予算は、次世代の科学者・研究者あるいは社会人を育てるだけでなく、学术界や日本社会全体を活性化させるために必要なのだということを、現役の研究者たちがもっとアピールすることによって環境が変わっていくと考えています。OECD（経済協力開発機構）加盟国の中で、日本のGDP比の教育予算が最低になったとか、客観的な数字を示すだけじゃなく、日本全体で科学や教育に積極的に予算を充てるという機運を作っていかないと、状況を変えていくのは難しいと思います。

山田 本学としても小・中・高校生を対象に、科学の面白さを伝えられるような活動に力を入れていきたいと考えています。白川先生には、いろいろな形でご協力をお願いいたします。最後に、本学の学生にメッセージをお願いします。

白川 筑波大学を卒業して社会に出た後、「自分は筑波大学の出身者なんだ」と自信を持って言えるようになることが、大切な宝物になると思います。専門科目は急いで決めることはありません。じっくりとやりたいことを決めて、充実した生活を送ってほしいですね。

山田 本日はお忙しい中、ありがとうございました。

導電性プラスチックが電気を流すしくみ

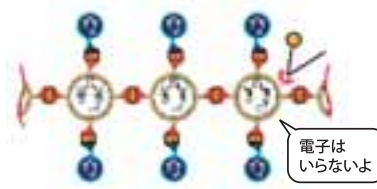
僕たちには次のようなルールがあります。

- 1.水素(H)には手が1本、炭素(C)には手が4本あります。
- 2.電子(e⁻)を常にもってたいです。
- 3.電子(e⁻)を介してだれかと手をつなぎます。
- 4.赤い手は結合力が強く、青い手は結合力が少し弱いです。

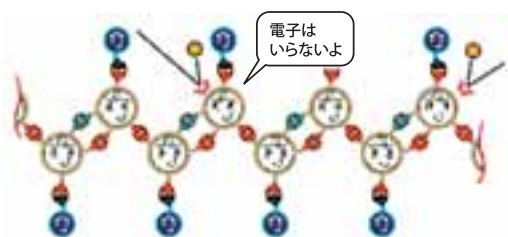


■普通のプラスチック(電気が流れない)の場合

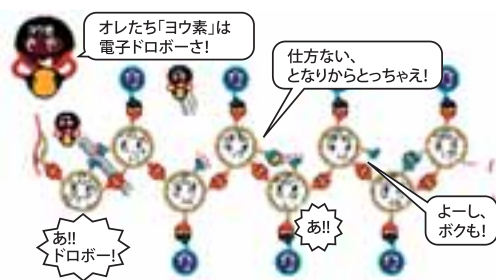
- 1.炭素(C) どうしが二つの手でつながっているところは、他の手にくらべて手をはなしやすい部分です。ここに電子(e⁻)をうばうヨウ素などの不純物が加わると電子(e⁻)はもっていかれてしまいます。
- 2.電子(e⁻)をとられた炭素(C)の手は別のところから電子(e⁻)をうばい、うばわれた手はさらに別のところから電子(e⁻)をうばう…。
- 3.こうして電子(e⁻)の受け渡しがされるようになると電気が通るようになります。



■電気が流れるプラスチックの場合



(普段は電気が流れません)



(電気が流れるようになります)

男女共同参画推進室

Office of Gender Equality

時代が大きく揺れ動く中、必要となる施策も日々変化して行きます。当室では、そのような変化にも機敏に対応したいと考えております。今後も皆さまと共に、筑波大学における男女共同参画を通じて、よりよい教育研究環境の実現を目指します。

<http://www.geo-wlb.tsukuba.ac.jp/>



主な活動

本学では男女共同参画の推進に関わる基本理念・基本方針を定めているように、男女の差なく多様性をお互いに尊重するという大学本来の考え方、価値観の中で、個人が持つ能力を存分に発揮できる環境づくりを推進しています。

そのために、男女共同参画推進室では、子育て支援などの環境整備、ワーク・ライフ・バランス相談室“あう”を開設し相談体制を整備、また、シンポジウムやセミナー・研修による意識啓発、男女共同参画に関する共通科目の開設などによる女性研究者裾野拡大のほか、筑波地区研究機関と連携しながら事業を実施しています。

意識啓発



管理職員FD研修

2010年6月24日
「大学における男女共同参画」
[講演者] 京都大学大学院文化研究科
教授 伊藤 公雄氏



学長・女性研究者懇話会

2010年6月25日
教員、研究員、博士課程院生
など11人が参加



トップマネジメントセミナー

2010年7月15日
「男女共同参画の推進は
知の変革と創造」
[講演者] 客員教授 堂本暁子氏

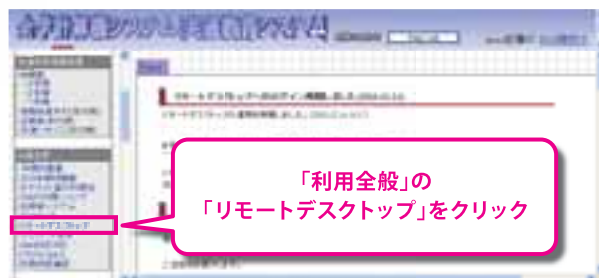
環境整備

ベビーシッター育児クーポン発行

【利用対象者】本学に在職する職員
【対象年齢】0歳～小学校3年生
【割引額】割引券1枚あたり1,700円
<http://www.geo-wlb.tsukuba.ac.jp/node/1818>

インターネットによる在宅支援

全学計算機システム(共通教育システム)のHPから



「利用全般」の
「リモートデスクトップ」をクリック

<http://www.geo-wlb.tsukuba.ac.jp/node/1826>



相談体制
整備

ワーク・ライフ・バランス相談室 “あう”

Work-Life Balance Counseling “Au”



“あう”の由来:

仕事と生活が支え「合う」

みんなに出「会う」

自分らしさに出「会う」

知恵、そしてつくばの象徴「OWL（ふくろう）」

あなたの「あう」、実現のために支援します

<http://www.geo-wlb.tsukuba.ac.jp/node/1698>

『ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）』とは

厚生労働省は、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」を定め、「仕事と生活の調和が実現した社会」作りのために、企業をはじめ働く者や、国民の効果的な取組、国や地方公共団体の施策を行動基準とし、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる」社会づくりを目指すというものです。（2007年12月政府の「ワーク・ライフ・バランス推進官民トップ会議」が「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」を策定）

WLB相談室“あう”の役割

個々が持つ問題に対して相談業務を提供

●仕事で起こる問題

労働条件、職場環境、研究・業務、
上司や部下について、ストレス、人間関係など

●ご自身に関する相談

家庭や子育て、介護、ヘルスケア等に関する問題、
将来のキャリアプランや方向性等の検討など

相談申し込み

<http://www.geo-wlb.tsukuba.ac.jp/node/1701>

電話:029-853-8503（相談室直通）

E-mail:geo-soudan@un.tsukuba.ac.jp



筑波キャンパス相談室



東京キャンパス相談室

予約受付

【筑波キャンパス】（月）～（金）9:00～17:00※ 【東京キャンパス】（金曜のみ）11:00～17:00※

※17:00～19:00のご相談も予約の上、応じます。

多数の教職員からの声を収集

WLB相談室“あう”は、相談室で受ける通常の相談業務に加えて、教職員の皆さまから直接話を伺いたいと考え、面談を実施しています。

生命領域学際研究センター

Life Science Center of Tsukuba Advanced Research Alliance
(Life Science Center of TARA)

2010年10月より「先端学際領域研究センター」は、「生命領域学際研究センター」に名称変更しました。新センター長に浅島誠東京大学特任教授が就任し、同センターは新しい1歩を踏み出しました。

これまでの歩みと今後の目標、そして未来への展望をご紹介します。



生命領域学際研究センター



遺伝子改変モデルマウス

■基礎科学研究の充実と幅広い学際研究を目指して

かつて日本の科学研究は、「応用技術や基礎技術を社会貢献につなげていくのは上手いけれども、基礎研究は欧米の研究にタダ乗りじゃないか」と批判を受けた時代がありました。そうした批判を跳ね返すべく、本学は1994(H6)年、江崎玲於奈学長時代に、日本の科学技術の将来を見据え、欧米に負けない基礎研究の充実と幅広い研究分野を連携・融合させた学際研究を目指し、「先端学際領域研究センター (Center for Tsukuba Advanced Research Alliance、通称:TARA)」を設立しました。筑波研究学園都市には、民間や政府系の製薬、工学、化学等の研究機関が数多く集積しており、「産・官・学」をつなぐセンターとして、大学の研究成果を社会に還元し、新しい研究領域の発展を担ってきました。

■「生命領域」をテーマに新しい学問領域を切り拓く

同センターは、生命科学、医学、材料・化学、ナノテクノロジー、IT・マルチメディアなどを基本に、各分野のトップ研究者を集め、先端的な研究所として歩んできました。代表的な研究として、気温や気候、環境汚染など環境の変化に順応して生きている生物の環境に対応する能力を分析・研究した山本雅之教授(現東北大学)らによる、「生命の環境応答」に関する研究プロジェクトをはじめ、

世界が注目する優れた成果を上げてきました。

2006(H18)年から4年半にわたって同センター長を務めた深水昭吉教授は、「そうした成果を踏まえ、どこに研究の出口を求め、どういう風に新しい分野を切り開いていけるかと議論を重ねてきました。私自身が生命科学を研究しているということもありますが、『生命領域』という言葉を使って新しい学際的な学問分野を作っていけないかということになりました。例えば生命活動を測定しようとする工学系の分野、その情報処理をする分野、さらに生命の機能を制御できないかという化学や薬学系にも繋がっていくだろうと。ですから『生命科学』ではなく、『生命領域』としたのです」と、名称変更の趣旨を話しています。新しい名称「生命領域学際研究センター (Life Science Center of Tsukuba Advanced Research Alliance)」は、学際研究の幅をさらに広げながら、そのテーマに「生命」を据えて新しい学問領域を切り開くという意味を明確にしたネーミングと言えます。なお、「Tsukuba Advanced Research Alliance」の英語名と通称の「TARA」は引き継いでいきます。

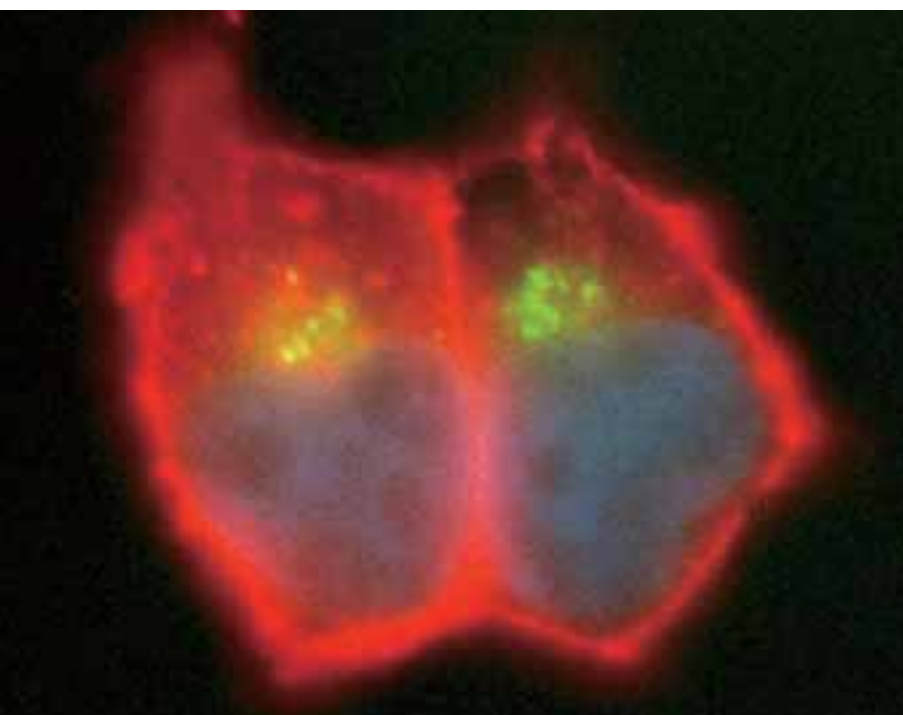
■世界トップレベルの《研究のハブ》に、次世代の人材を育成する

「生命領域」の学際的な広がりとは、どんな分野なのか。浅島センター長は、「生命科学＝ライフサイエンスは、これまでも医学、農学、生物学、薬学などが学際的に研究

パスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスにはその組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。



心肥大モデル



腎由来細胞

されてきましたが、現在は、さらに工学や人文・社会科学や芸術など、領域がとて幅広くなっています。私自身の研究でもいろんな分野の人たちと協力しながら研究を進めています。私は発生生物学の専門家として、卵がどうして親になっていくのかという形づくりの仕組みや、人間の体の中にある器官や臓器がどうしてできるのかという分子メカニズムなどを研究してきました。この研究には、単に生物学だけではなく、研究過程でたくさんの情報が出てきますので、情報処理の分野と関わったり、工学系の研究者と新しいデバイスを作ったり、数学系、さらに倫理の問題なども関わってきたりもします」と話しています。また、生命科学の枠を超えていくその目的については「多くの動物はいろいろな環境変化に順応して生きています。氷河期を乗り越えて生き残っている生物もたくさ

んいます。他の生物を研究することによって、人間をさらに深く理解できるのです。他の生物から、学び共存する仕組みを考えることによって、いま地球上で起きているいろいろな問題を解決していくことにもなると考えています」と語っています。

今後は「基礎研究は、一人の研究者一代ではできない部分もあります。研究のバトンを引き継ぐ人材を育成し、世界や各企業で活躍できる人材を育てることも目標の一つです」と深水教授は話し、浅島センター長も「まずは、世界トップレベルの研究を行うということ。欧米やアジア諸国も含めて人材交流をしながら、産業界との連携も魅力あるものにし、ここを研究のハブにしていきたい」と熱く抱負を語っています。



浅島誠センター長



「確かなる日本語力の育成に向かって」

筑波大学附属聴覚特別

130年にわたる聴覚教育のパイオニア

JR総武線「市川駅」からバスと徒歩で約15分、または京成電鉄「国府台駅」から徒歩で約10分のところに本学はあります。映画『男はつらいよ』でおなじみの寅さんの実家がある葛飾区柴又からは、江戸川を挟み直線で約2.5キロに位置し、周りには和洋女子大学や国府台高校もあります。現在、幼稚部から専攻科まで255人が学び、そのうち39人が寄宿舎で生活しています。教職員は102人（寄宿舎指導員含む）です。本校は、全国93校の聴覚障害児教育を行う学校の中で、唯一の国立大学法人の学校です。

本校の歴史は、宣教師のボルシャルトらが訓盲院設立を考え、楽善会を発足させた1875年にさかのぼります。同会が1879年に訓盲院の校舎を完成させ、翌年2月に盲生2人、6月に聾生2人が入学しスタートしました。その後、文部省の直轄学校などを経て、1978年に筑波大学附属聾学校、2007年からは現在の校名になっています。

乳幼児への教育

本校の特色の一つとして、乳幼児教育相談が挙げられます。新生児～2歳児を対象に、昭和40年代から行われており、近年は新生児聴覚スクリーニングの普及に伴い、0歳児の相談が増えています。問い合わせの多くは、母親からですが、父親や祖父母からの相談もあり、相談者の地域も千葉県内にとどまらず、東京都、埼玉県、茨城県など幅広くなっています。初回面談では、本校を訪れるまでの経緯や障害への不安など、さまざまなことを聞き、母親が相談して良かったと思えるように、心のケアをしています。その後、小グループの活動や個別指導を通して、母親が子どもとどう接していくべきかを支援しています。最終的には、子どもが母親とのコミュニケーションを心地良いものと感じ、自分から自由にコミュニケーションを取るようになることが、言葉の獲得の土台となっていきます。

幼稚部は、3～5歳児が在籍しており、補聴器を使いこなすことに配慮しつつ、集団補聴システムを活用し、十分に聴覚が活用できることを心掛けています。聴覚に障害があっても、話しことばから日本語を育てるのが幼児にとって望ましいと考え、生活や遊びのあらゆる場面で「話し合う」活動を実践しています。聴覚の活用はもちろん、音声の他に、身ぶり手ぶり、絵や写真、その

他のコミュニケーションツールを活用して、次第に日本語でのコミュニケーションや考える力を身につけさせています。

小学部から中学部へ

小学部に入ると、通常の学校と同じ教科書を使用しますが、耳から入る情報に制約がある中で、日本語力を育むため、児童の実態を見極め、個別指導も多く取り入れ、発達段階に合わせて多様な方法で指導を行っています。これらの指導事例を一冊にまとめた『ことばを豊かに育てる100の事例』（聾教育研究会）は、全国の聾学校で活用してもらうために、出版されています。具体的には、聴覚口語法を基本とした少人数の授業で、教科学習の基礎となる日本語そのものを身につけさせ、全人的な心の発達を促すための集団生活も経験させています。

中学部では教科担任制となり、学習内容も高度になります。そのためコミュニケーションの確保を心掛けており、その一つとして、「電子情報ボード」や「教材のCD化」など、視覚に訴える教材提示方法の開発にも努めています。また、「キャリア教育」「生徒会活動・部活動」「学習支援講座」などの活動を行い、生徒同士がことばを通して刺激し合い、力を高めていくことが、高等部指導の土台となっていきます。

社会に貢献できる人材の育成

高等部には、全国各地から多くの生徒が入学します。分かる授業を受けたい、さまざまな活動を行いたいとの希望と、大学進学のための高い学力を身につけたいという、明確な目的意識を持って入学してきます。高等部の教育課程は、普通学校と比べて、「自立活動」という教科が設定されている以外は同じで、近年は、一般の大学へも多く進学しています。そのため、習熟度別学習グループ編成と類型選択を取り入れた教育課程となっており、さまざまな分野の大学への進学を可能にしています。また、高等部では、社会の中で自己の能力を最大限に発揮しながら生きていくために、より柔軟でたくましい心を持ち、聴覚障害の自分を肯定的に見つめられる生徒の育成を目指しています。

高等部卒業後の課程には「造形芸術科」「ビジネス情報科」「歯科技工科」の専攻科があります。特に、歯科技工科は、義歯や矯正装置などの作成および修理を行う

いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。
130年の長い歴史の中で、わが国の聴覚障害教育リードする、筑波大学附属聴覚特別支援学校を紹介します。

支援学校

医療職であり、全国54校の歯科技工士養成所の中で、唯一の聴覚障害者のための歯科技工士養成所であり、数多くの歯科技工士を世に送り出しており、広く社会に貢献しています。

今井二郎副校長は「今後も、本校は、筑波大学障害科学系との連携のもとに日本の聴覚障害教育の先進校として、聴覚障害のある子どもたちの潜在能力を開発して、何事にも挑戦する意欲を持ち、社会に貢献できる生徒を育てていきたい」と話しています。

◆第47回全国聾学校陸上競技大会で 本学の陸上競技部1部女子総合優勝 (女子12年連覇)など大活躍



長野県松本平広域公園陸上競技場で開催された「第47回全国聾学校陸上競技大会」(10月2～3日)で、本学の陸上競技部が大活躍をしました。

総合得点で1部(高等部)女子総合は優勝。12連覇を果たして特別表彰を受けました。

1部男子総合も5位に入賞する健闘を見せました。

主な上位入賞者は次の通りです。

○1部(高等部)

- ▽竹之内歩未、寺澤有希、竹内優奈、小川望：
女子4×100mリレー 3位
- ▽林雄大、鹿子澤拳、久保貴司、大久保純一：
男子4×100mリレー 3位
- ▽竹内優奈：3,000m 1位、1,500m 2位
- ▽小川望：200m 2位、400m 2位(大会新)
- ▽竹之内歩未：3,000m 3位
- ▽寺澤有希：400m 3位

○2部(専攻科)

- ▽鈴木祐司：5,000m 1位、1,500m 2位

■乳幼児教育相談・幼稚部



■小学部



■中学部・高等部



■専攻科



第10回 陸上競技部

速く、高く、遠くへ チームワークで頂点へ!!



インカレ男女アベック優勝や大会連覇、世界で活躍するアスリートを輩出するなど、トラック&フィールド両面で大学王者に君臨する「陸上競技部」(宮下憲部長、大山圭悟顧問兼監督、渡邊涼(体専3年)主将)。創部は1973年。「一人一役」をモットーに200人の全部員がチームを支え、目標に向かって日夜練習に励んでいる。

練習は短距離、障害、中・長距離、跳躍、投てき、混成の6パートに分かれて行う。陸上競技場は、1周400mのトラックにホームストレート10レーン、フィールドには芝が張られ、跳躍や投てき種目も含め各種目一堂に練習が可能な、広く充実した施設だ。トレーニング室も隣接している。大山監督は「これだけの規模の設備が整っているところはめったにない」と満足気に話す。

この環境と部員の力を生かして、地域貢献にも一役担っている。附属学校の児童・生徒らを招き、体力測定や競技のデモンストレーションを行い、体育指導で交流を図ったり、地域の小学校の競技会の運営やつくばマラソンのスタッフとして事務処理や沿道での給水サポートも行っている。

同部の目標は、日本インカレのアベック優勝。今年のインカレでは女子

は2年連続20回目の優勝を決めたが、男子が6位とおよばなかった。

多数の上位入賞者を出すなど同部の強さの原動力は、特定の種目に力を注ぐのではなく、「トラック&フィールド、そして男女ともに協力して、常に全力で取り組む」姿勢。創部以来、代々受け継がれている精神にある。陸上競技は大半が個人競技だが、団体競技もあり、一人一人の力がチーム力となる。本年度の日本インカレは、その象徴ともいえる。女子は各種目で優勝者はなかったが、総合力で優勝をつかみとった。来季は男女とも一層の飛躍に期待がかかる。

この大会で本学唯一の個人優勝を果たしたのが110mハードルの大室秀樹選手(体専2年)。13秒76で自己ベストを更新した。「同じ種目の日本記録保持者である谷川聡コーチの下で、練習できることをうれしく思います。自己ベストを更新し、ユニバーシアード、世界陸上、そして、ロンドン(五輪)を目指したい」と目を輝かせる。800mの中村康宏選手(体専2年)も「600mまでは日本記録に並ぶタイムが出ているが、後半疲れが出てしまうので、動きの修正をして、次の大会に挑みたい。目下の目標はユニバ代表になること」ときっぱり。女子も頼もしい選手が多い。世古和選手(体専1年)は世界



ジュニアユース(10月・カナダ)で200m優勝のスプリンター。「高校とは違って、練習メニューは自分で考えて実践する。良いお手本がたくさんあるので、見習って、記録を伸ばしたい」とチャレンジ精神旺盛だ。関東インカレ(5月)の800mで2分4秒95の自己ベストと大会新記録を出した真下まなみ選手(体専1年)は、「いつもより勝負に対する気持ちが強く出て、良い記録が出た。メンタル面も大切と分かったので、心身ともにしっかり作り、来季の連覇を狙います」と静かに闘志を燃やす。



大山監督は「記録が伸びたり、スランプに陥ったり、部員のレベルはさまざま。競技力が混在しているのが、本学陸上部の強みの一つ。多くの経験を積み、いろんな場面で対処できる人間に育ってほしい。厳しい練習に身を置くことで成長してほしい」と願う。「学生時代をいかに過ごすか。今しかできないこと、自分が変えられる貴重な時なのだから、信じてやれば必ず光が見えてくるはずだ」と部員を励まし続ける。



今後は「今まで以上に、国際レベルで戦える競技者を育てること」も目標に掲げる。チーム内のバランスやスタッフ、時間の確保も課題だ。「(競技者も指導者も)どれだけエネルギーを注げるかです」と強化に貪欲に取り組む姿勢だ。

「部員たちは努力を積み重ねているので、良い雰囲気育てていけば、良い結果が出せるだろう」と大山監督は言う。アベック優勝の目標に向かって成長を続ける選手たち。次なるステージに向かって、まい進する。

このコーナーは、前身の師範学校から135年以上の歴史を有し、スポーツ分野において、オリンピックの金メダリストを始めとし、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会を紹介します。

主な競技成績及び今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】ホームページ <http://club.taiku.tsukuba.ac.jp/>

【筑波大学体育会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

陸上競技部 [記録]

■日本ジュニア・ユース選手権

【男子走り高跳び】**優勝** 戸邊直人 2m24

※大会新記録、ジュニア歴代3位、自己新記録

【男子ハンマー投げ】**優勝** 保坂雄志郎 64m40

【男子800m】3位 阪本大樹

【男子やり投げ】2位 眞里谷健司

【女子100m】**優勝** 世古和 11秒98

【女子棒高跳び】**優勝** 榎本優子 3m70

【女子円盤投げ】2位 糸満みや

【女子100mハードル】3位 相馬絵里子

【女子三段跳び】2位 大坂阿玖里

蹴球部 [記録]

■関東大学サッカー1部

【総合】2位 得点王、新人賞、ベスト11(FW):赤崎秀平
4年間最多出場、ベスト11(MF):小澤司
ベスト11(GK):須藤壮史

■第59回全日本大学サッカー選手権大会
3位

剣道部 [記録]

■第56回関東学生剣道新人戦大会

優勝

■第11回関東女子学生剣道新人戦大会

優勝

柔道部 [記録]

■全日本学生体重別選手権

【女子57kg級】2位 牧志津香

■グランプリ(ロッテルダム)

【女子78kg級】**優勝** 緒方亜香里

■全日本学生柔道体重別団体優勝大会

【男子】**優勝**(7年ぶり2度目) 優秀選手賞:森下純平、西山雄希

【女子】ベスト8

■講道館杯全日本柔道体重別選手権大会

【男子66kg級】**優勝** 小寺将史

【男子73kg級】3位 西山雄希

■講道館杯全日本柔道女子体重別選手権大会

【女子57kg級】**優勝** 牧志津香

■第16回アジア競技大会

【男子60kg級】2位 平岡拓晃

【男子66kg級】3位 森下純平

【男子73kg級】**優勝** 秋本啓之

【男子90kg級】**優勝** 小野卓志

【女子78kg級】2位 緒方亜香里

女子バスケットボール部 [記録]

■第62全日本大学選手権大会

3位 優秀選手賞、得点王:福士佳恵

女子ハンドボール部 [記録]

■第46回全日本学生選手権大会

3位 優秀選手賞:山野由美子

第10回 環境サークルエコレンジャー

幅広い活動通し、エコの意義追求



大学キャンパス内だけではなく、地域社会から地球規模まで、環境を守るため、さまざまな切り口から解決策を探り活動している、学内で唯一の環境サークル『エコレンジャー』（佐竹孝顕顧問）。

環境問題に深い関心を持つ学生が中心となって、1997年に立ち上げた。現在のメンバーは留学生を含む8人。「高校時代に自然環境の調査をしていて、水質汚染を目の当たりにし、環境問題に興味がわきました」と話すのは三宅紀貴前代表（生物資源学類3年）。12月から新代表に就任した高橋大輝さん（理工学類2年）は「高校時代から地域のまつりでゴミ分別や美化活動をしていたので、サークルは“エコレン”に決めていた」と入部の動機はさまざまだ。

活動は、メンバー個人が“やりたい”と考えたプロジェクトをプレゼンテーションし、メンバー各々が、その中で興味を持ったり賛同した分野のプロジェクトに参加するスタイルを取る。現在の活動は、宿舎で牛乳パックの回収、早朝、一の矢と平砂の宿舎周辺をゴミ拾いする『あさ（ハOハ）（あさがお）』、お祭りや地域のイベントでゴミ分別をナビゲートする『Naごみ（なごみ）』、環境問題の意識改革を支える『べねっと』、エコに対する知識を深める勉強会『エコトーク』、地球環境をテーマにしたカード

ゲーム「マイアース」を活用し、ゲーム感覚でエコを考える『マイアースプロジェクト』、メンバー間でエコをテーマに一句詠み、エコ意識を高める『エコ川柳』の、6つのアイデアに満ちたプロジェクトがあり、楽しみながら自主活動を展開している。

学園祭では、食を通してエコを考える“エコ調理”を実践。食材は地産地消を心掛け、野菜や果物の皮まですべてを無駄なく使用したカレーライスを提供し、使用した食器類はできるだけリユース。水を汚さないこと、ゴミをださないこと、食べ物やエネルギーを大切にすることなどをアピールした。他にも、全代会と協力し、年度末に卒業生たちからの“置き土産”である家具や家電を、新入生たちに無料提供する、リサイクル市も好評だ。

広げよう
ゴミの
君の分別
手で



書籍部で
「袋いります？」
「大丈夫です」



活動は学内だけではない。県内外から大勢の観光客が訪れる「まつりつくば」(8月)では、『Naごみ』プロジェクトが大活躍。つくば市の分別ルールに沿って、メンバーたちがゴミ分別のナビゲートを行っている。「私たちはあくまでもサポート。分別を自ら体験して、少しでも環境について考え、意識を持ってもらうことが狙いです」と三宅さん。

そんな地道な活動が広く知られ、今年から、地域の小・中学校PTAが主催するまつりに、環境教育のゲストティーチャーとして招かれた。会場にゴミステーションを設置し、小・中学生と一緒にゴミ分別や、大勢の参加者を前に 赤、青、緑、黄、ピンク色のマスクを被った5人の“地球を守るエコレンジャー”に変身して、身近な題材で資源やゴミ問題に対する正しい知識と自分たちでできる取り組みを、オリジナル劇で訴えた。分別に協力的な子どもたちが多く、充実した一日を過ごしたという。

「分別したゴミは、リサイクルセンターなどの回収業者に引き取っていただいたりしていますが、その後はどうなっているのか、分別した意義はあったのか、悩むこともあります」と高橋代表。しかし、「他人任せではなく、自分たちでできることをコツコツとやっていきたい」と前向きに捉える。



エコとは?と聞くと、三宅さんは「哲学」です。答えはなく、それを考える過程に意味があると思っています。意識を持って伴った行動をすること」と話し、高橋代表は「循環型社会の追求です。試行錯誤して意義を見出したい」と熱く語ってくれた。

「楽しみながらエコをやっています」「仲間たちと和気あいあいと活動していますので、これからも一生懸命に取り組んでいきたい」とそれぞれに意気込みを話す。

食、ゴミとリサイクル、地球温暖化など、地球環境の平和のために、エコレンジャーたちは、今日もアクションを起こし続けている。

このコーナーでは、課外活動として、演奏会や展覧会、各種発表会、またボランティア活動などで、その腕前を披露している、文化系・芸術系サークルの催しを紹介します。

【筑波大学芸術系サークル連合会】ホームページ <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

【筑波大学文化系サークル連合会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

ギター・マンドリン部

2/12 定期演奏会

[場所] ノバホール
[時間] 午後6時開場/6時半開演

THK筑波放送協会 記録

■第27回NHK全国大学放送コンテスト 12/4・5
(京都市生涯学習総合センター)

[DJ部門] 1位 『地味☆チェン』
[アナウンス部門] 3位 森遥香(人文・文化学群 人文学類2年)
[ラジオドラマ部門] 3位 『おとくいさま』
[映像CM部門] 3位 『母さんになにがわかる』
[TVドキュメンタリー部門] 3位 『つくちゅう 〜カメラにマイクが入ることが恐ろしい〜』

津軽三味線倶楽部無弦塾

1/22 第13回卒業公演 [場所] ノバホール

[時間] 午前の部: 午前10時開場/10時半開演
午後の部: 午後4時開場/4時半開演
[料金] 一般3000円、学生1500円

吹奏楽団 記録

■第45回県アンサンブルコンテスト 12/12
(常陸大宮市文化センター)

[大学・一般の部] 金賞: 打楽器4重奏
※第16回東関東アンサンブルコンテスト(1/22,1/23) 出場決定

嘉納治五郎像除幕式を挙行

柔道の父と呼ばれ、本学前身の東京高等師範学校の校長を務めた、嘉納治五郎(1860～1938)の生誕150周年を記念した銅像が、本学大学会館前広場に建立され、嘉納氏の誕生日にあたる12月10日、除幕式が行われました。

式典は、阿江通良体育専門学群長の司会で進み、清水一彦教育担当副学長による建立の経緯説明のあと、山田信博学長が挨拶。来賓の鈴木寛文部科学副大臣が祝辞を述べられました。続いて、鈴木副大臣、大泉博子衆議院議員、岡田広参議院議員、市原健一つくば市長、布村幸彦文部科学省スポーツ・青少年局長ら関係者により除幕が行われ、気概あふれる嘉納氏の銅像が現れると、見守っていた学生や職員から、大きな拍手が起こりました。

銅像は、高さ2.14メートル(銅台座含む)。文化勲章受章者で、日本を代表する彫刻家の朝倉文夫氏(1883～1964)が制作した、現在、本学東京キャンパスと講道館に設置されている像と同じ原型を使用し、鑄造されました。

式典の最後には、西川潔学生担当副学長から像について説明があり、参列者で記念撮影が行われました。



関係者による除幕

(左から西野虎之介茗溪会理事長、河野一郎本学名誉教授、加藤澤男本学名誉教授、布村幸彦文部科学省スポーツ・青少年局長、谷口功熊本学学長、山田信博本学学長、鈴木寛文部科学副大臣、大泉博子衆議院議員、岡田広参議院議員、市原健一つくば市長)



嘉納治五郎像写真



祝辞を述べられる鈴木寛文部科学副大臣



記念撮影

鳩山由紀夫前首相が 「筑波大学と地元高校による高大連携シンポジウム2010」で講評

筑波大学学園祭初日の10月9日、国立大学フェスタ2010の一環として、「筑波大学と地元高校による高大連携シンポジウム2010」が本学で開かれ、県教育委員会、県立高等学校長、高等学校教員、高校生および保護者など約300人が参加しました。

このシンポジウムは、本学と茨城県教育委員会の共催事業で、科学技術振興機構、常陸太田市および日本オペレーションズ・リサーチ学会からの後援を受けており、社会工学を専門とする教員・学生と、地元の県立高等学校との連携により実施された「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」2件の成果発表をメインとしています。

サプライズ企画に、オペレーションズ・リサーチで博士号を取得された鳩山由紀夫前首相を研究者としてお招きし、腰塚武志前筑波大学副学長とともに、成果発表の講評を行っていただきました。



平成22年度筑波大学筑峰会(事務系職員OB会)を開催

平成22年度筑波大学筑峰会(事務系職員OB会 会長:篠澤公平元筑波大学事務局長)の定例会が11月5日に開かれ、会員76人が出席し、篠澤会長の挨拶のあと、山田信博学長が歓迎の挨拶と近況報告を行いました。

その後、大学会館レストランブラザで行われた懇親会には、山田学長および森本浩一副学長も出席し、本学外の機関に在職する本学出身者11人と現職員63人も加わり、五十嵐耕一副会長、森本副学長の挨拶、乾杯の音頭に続き、本学職員と学生有志による本学のメッセージソング『IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え』(作詩・作曲:筑波大学卒業生等)の合唱が披露され、大いに盛り上がりを見せました。



第1回筑波大学研究成果発表フォーラム2010を開催

「第1回筑波大学研究成果発表フォーラム2010－IMAGINE THE FUTURE. 未来構想大学を目指す最先端研究の展開－」が12月1日、東京国際フォーラム・ホールD7（東京都千代田区）で開かれました。

フォーラムでは、山田信博学長から本学の現状とトピックスの紹介、倉持隆雄文部科学省研究振興局長の来賓挨拶^{あいさつ}に続き、江崎玲於奈筑波大学元学長（1973年ノーベル物理学賞）による“In Half a Century of Research What did I Learn?”をテーマにした特別講演が行われました。その後のポスターセッションに続き、本学の研究者4人が最先端研究を発表。参加者は、企業、大学、官庁、自治体関係者など250人を超え、筑波大学の研究活動等に対する学外からの関心の高さを印象付けるフォーラムとなりました。



山田学長が社団法人日本プロジェクト産業協議会会長と懇談

山田信博学長は12月7日、本学と教育、研究、産学連携、グローバル人材の育成などに係る連携協力に関する協定を締結している社団法人日本プロジェクト産業協議会（JAPIC：Japan Project-Industry Council）の三村明夫会長と、「我が国の大学を取り巻く環境」や「産業界が求めている学生」などについて懇談を行いました。



「エコステーション」オープニングセレモニー開催

本学「エコステーション」のオープニングセレモニーが12月3日に開かれました。

式典では、栗本宣和準研究員（体育科学系、つくばエコシティ推進グループ員）と関係学生から本プロジェクトの紹介の後、つくば・地域連携推進室長の森本浩一副学長とつくばエコシティ推進グループ長の井上勲教授からそれぞれ挨拶があり、続いて、体育・芸術の学生がペイントした古紙保管用のコンテナの前で、関係者によるテープカットが行われ、エコステーションの幕開けとなりました。参加者からは「事務・教員・学生、また、芸術・体育のコラボレーションにより実現した、素晴らしい取り組み。学内環境意識醸成に向けて頑張してほしい」という声が聞かれました。

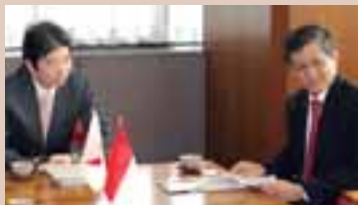
エコステーションで回収している資源は、古紙、ペットボトル、ペットボトルキャップ、缶、ビンで、設置エリア以外の学内からの持ち込みも可能です。



交流

10月5日(火) 学長表敬・懇談

来訪者：インドネシア研究技術担当大臣一行
目的：スハルナ研究技術大臣（学振の研究員として本学に在籍）と当時の指導教員の板野肯三教授との懇談を実施



10月6日(水) 学長表敬・見学

来訪者：チュニジア共和国高等教育科学研究大臣一行
目的：見学及びチュニジア人留学生との交流会を開催



10月18日(月) 学長表敬

来訪者：中国科学院研究生院管理学院院長一行
目的：本学の中国经济研究に関心を持つ研究者、中国人教員や研究員と中国经济の動向や政策に関する協議および講演会の実施



12月9日(木) 学長表敬

来訪者：ウズベキスタン共和国上院議員、学術・教育・文化・スポーツ委員会委員長代表団一行
目的：中央アジア事務所主催のラウンドテーブルディスカッションに出席



受賞

■医学系技術室の森敏幸技術専門職員と 坂本順子技術専門職員が文部科学大臣表彰受賞

医学系技術室の森敏幸技術専門職員と坂本順子技術専門職員が11月30日、長年にわたる大学病院、医学教育の業務功労者として、文部科学大臣表彰を受けました。



山田信博学長に受賞の報告＝左から森敏幸専門職員、山田信博学長、坂本順子技術専門職員、金保剛教授(医学系技術室長)

●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導・研究室
中華人民共和国日本大使館公使参事官から感謝状	張 振垂 教授(生命環境科学研究科 持続環境学専攻)	_____
江南大学(中国) Honorary Professor	小林達彦 教授(生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)	_____
2010年水文・水資源学会学術出版賞	杉田倫明 教授(生命環境科学研究科 地球環境科学専攻) 田中正 名誉教授 田瀬則雄 教授(生命環境科学研究科 持続環境学専攻) 浅沼順 教授(生命環境科学研究科 地球環境科学専攻) 辻村真貴 准教授(生命環境科学研究科 持続環境学専攻) 山中勤 准教授(生命環境科学研究科 地球環境科学専攻) 飯田真一 元准研究員(生命環境科学研究科) 岩田拓記 元准研究員(陸域環境研究センター) 濱田洋平 元研究員(陸域環境研究センター)	_____
独立行政法人日本学術振興会平成21年度 特別研究員等審査会専門委員(書面担当)表彰	鈴木雅和 教授(人間総合科学研究科 芸術専攻)	_____
第65回日本体力医学会大会若手研究者奨励賞	上林清孝 助教(システム情報工学研究科 知能機能システム専攻)	_____
日本化学会第4回関東支部大会優秀講演賞	金原正幸 助教(数理物質科学研究科 化学専攻)	_____
日本金属学会功労賞(第8回)	宮崎修一 教授(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)	_____
ドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章 (Verdienstkreuz I.Klasse)	新井誠 教授 (ビジネス科学研究科 法曹専攻[法科大学院]専攻長)	_____
瑞宝中綬章	児玉之宏 名誉教授	_____
Hatanaka Award at 14th International Congress on Neutron Capture Therapy	松村明 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、附属病院副院長)	_____
平成22年度茨城県医師会勤務医部会学術奨励賞	山本哲哉 講師(人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)	_____
日本真空協会第19回真空進歩賞	近藤剛弘 助教(数理物質科学研究科 物質創成先端科学専攻)	_____
平成22年度茨城県特別功労賞	山海嘉之 教授(システム情報工学研究科 知能機能システム専攻)	_____
第17回国際磁気共鳴学会若手研究者渡航費助成金	太虎林 准研究員(数理物質科学等支援室[化学専攻])	_____
ナノ学会第8回大会若手優秀発表賞	江口美陽 准研究員(数理物質科学等支援室)	_____
国立科学博物館から感謝状	路川宗夫 技術専門職員(生命環境科学等技術室)	_____
フラーレン・ナノチューブ学会第7回大澤賞	Xing Lu 研究員(生命領域学際研究センター外国人研究員)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、生命領域学際研究センター)
日本化学会第4回関東支部大会優秀講演賞	澤井孝治 研究員(数理物質科学研究科) 高野勇太 非常勤研究員(生命領域学際研究センター)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、生命領域学際研究センター)
ナノ学会第8回大会若手優秀発表賞	吉永泰三(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年) 池田飛展(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程1年)	寺西利治 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
2009年度国家優秀自費留学生奨学金 授与	李ミヨウ(生命環境科学研究科 持続環境学専攻[2009年度修了])	張振垂 教授(生命環境科学研究科 持続環境学専攻)
平成22年度繊維学会若手優秀ポスター賞	川島裕嗣 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期課程1年)	後藤博正 准教授 (数理物質工学研究科 物性・分子工学専攻)
社団法人日本不動産鑑定協会平成22年度研究論文奨励賞	小松広明(ビジネス科学研究科 企業科学専攻 博士後期課程2年)	白田佳子 教授 (ビジネス科学研究科 国際経営プロフェッショナル専攻)
化学工学会第42回秋季大会材料・界面討論会優秀ポスター賞	中野俊介 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程2年)	佐藤誠吾 教授(生命環境科学研究科 生物機能科学専攻) 市川創作 准教授(生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)
第21回基礎有機化学討論会ポスター賞	田中裕明(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程2年)	関口章 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
第28回(2010年春季)応用物理学会講演奨励賞	齋藤隆允 (数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻 博士前期課程2年)	末益崇 教授(数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻)
日本ソフトウェア科学会第27回大会学生奨励賞 (一般・研究会・ソフトウェア論文セッション部門)	小鍛冶雄一郎 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士前期課程2年)	亀山幸義 教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻)

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導・研究室
社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会 第28回学生論文賞	鮎川矩義 (システム情報工学研究科 社会システム工学専攻 博士前期課程1年)	山本芳嗣 教授 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)
第65回日本体力医学会大会若手研究者奨励賞	松井崇(人間総合科学研究科 体育科学専攻 博士後期課程2年[日本学術振興会特別研究員])	征矢英昭 教授(人間総合科学研究科 体育学専攻)
第75回日本陸水学会優秀ポスター賞	荒居博之 (生命環境科学研究科 生命共存科学専攻 一貫制博士課程2年)	福島武彦 教授(生命環境科学研究科 生命共存科学専攻)
日本リスクマネジメント学会第3回 学生・大学院生・若手研究者研究報告表彰制度最優秀賞	今村明代 (ビジネス科学研究科 企業科学専攻 博士後期課程3年)	白田佳子 教授 (ビジネス科学研究科 国際経営プロフェッショナル専攻)
日本化学会第4回関東支部大会優秀ポスター賞	森川稔之(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年) 小関雄太(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年)	市川淳士 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
	多田邦生(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年) 三井大輔(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年)	寺西利治 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
	佐藤悟(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年) 永島佑樹(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年) 西本一彬(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、生命領域学際研究センター)
	柴田友和(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程2年)	山本泰彦 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
日本化学会第4回関東支部大会学生講演賞	佐藤良太(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年) 猿山雅亮(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年) 鬼形尚子(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年) 吉永泰三(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年)	寺西利治 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
	栗原広樹(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年) 青山亮(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、生命領域学際研究センター)
	三浦陽介(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年) 田村浩康(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年)	新井達郎 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、研究基盤総合センター・分析部門)
	志田堯也 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	奥野光 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
International Conference on Nanoscopic Colloid and Surface Science(NCSS2010) BEST POSTER AWARD	吉永泰三(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年) 小堀啓(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程2年)	寺西利治 教授(数理物質科学研究科 化学専攻)
The 25th Pan Pacific Congress of Real Estate Appraisers. Valuers and Counselors Bali, Indonesia 2010. Best Paper Award	小松広明(ビジネス科学研究科 企業科学専攻 博士後期課程2年)	白田佳子 教授 (ビジネス科学研究科 国際経営プロフェッショナル専攻)
International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia (USMCA2010). "Student Award"	SHAH MD.FAIZ (システム情報工学研究科 リスク工学専攻 博士後期課程2年)	村尾修 准教授(システム情報工学研究科 リスク工学専攻)
The 6th International Symposium on Organic Photochromism (ISOP2010) Young Scientist Best Poster Award	三浦陽介(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年)	新井達郎 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、研究基盤総合センター・分析部門)
The 7th Korea-Japan Symposium on Frontier Photoscience- 2010 Excellent Student Poster Presentation Award	田崎聡美(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年)	新井達郎 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、研究基盤総合センター・分析部門)
2010年度日本OSS奨励賞	古橋貞之 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士前期課程1年)	新城靖 准教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻)
第62回日本生物工学会優秀学生発表賞	西川和範 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程1年)	王碧昭 教授 (生命環境科学研究科 生命産業科学専攻、遺伝子実験センター)
第29回認知症学会奨励賞(臨床研究部門)	高橋晶(人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻 一貫制博士課程3年)	朝田隆 教授(人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)
Fairchild Award at 14th International Congress on Neutron Capture Therapy	白川真 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻 一貫制博士課程2年)	松村明 教授(人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)
平成22年度 電気学会東京支部茨城支所研究発表会 オールセッションの部優秀発表賞	地引政司 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程1年) 菅原孝道 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程1年)	奥野光 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
日本水処理生物学会第47回大会ベストプレゼンテーション賞	梅田哲弥 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程2年) 鹿又真 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程2年)	杉浦則夫 教授(生命環境科学研究科 生命産業科学専攻)
2010日本水泳・水中運動学会ヤマハ最優秀論文発表賞	糸井紀(人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期課程2年) 角川隆明(人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期課程2年)	椿本昇三 教授(人間総合科学研究科 体育学専攻)
日本微生物生態学会優秀ポスター賞	佐藤千恵 (生命環境科学研究科 生命産業科学専攻 博士後期課程1年)	内海真生 准教授(生命環境科学研究科 生命産業科学専攻)
日本ソフトウェア科学会第27回大会学生奨励賞 (学生セッション部門)	池田光雪(情報学群 知識情報・図書館学類4年)	鈴木伸崇 准教授 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)
リサーチフェスタ2010研究発表部門 金賞(口頭発表)	上原拓也(生命環境学群 生物資源学類4年)	本田洋 教授(生命環境科学研究科 生物圏資源科学専攻)
〃 奨励賞(ポスター発表)	伊藤史紘(生命環境学群 生物学類3年)	白岩善博 教授(生命環境科学研究科 情報生物学専攻)
第5回日本でタイ語を学ぶ大学生のための タイ語弁論大会最優秀賞	湯澤絵里子(社会・国際学群 国際総合学類4年)	井田仁康 教授(人間総合科学研究科 教育学専攻)

羽ばたく OB & OG

麗幸子さんは
是女子日



—本学への進学理由と、学生時代の思い出をお聞かせ下さい。

首都圏の国公立大学で、新しい建学の精神があり、学業に専念できる環境に惹かれました。大学2年の時に中心メンバーとなって『筑波学生新聞』（1982～2007、第255号以降休刊）を立ち上げたことが最大の思い出です。インディペンデントな学生メディアを作るため、在籍した『筑波大学新聞』と袂を分かち、同じ志を持つ先輩たちと文サ連を出て民間のアパートを借り、広告集めから記事づくりすべてを学生主体で行いました。3～4年時にはマスコミについて幅広く学ぶ「青木塾」で、青木彰先生からジャーナリズムの薫陶を受けて、大変大きなことを学びました。

—就職先を決めた動機は何ですか。

男性と女性では行動規範が違い、女性の生きづらさを感じていましたから、それを解消するような仕事に就きたかったのです。学生新聞もそうですが、記事を書きたい思いが強くあり、マスコミを目指しました。日経新聞の記者になった先輩に、日経グループの女性誌部門の話聞き、きらびやかな女性誌ではなく、課題を持つ女性をサポートする方針に惹かれ、84年に日経BP社前身の日経ホーム出版社に入社しました。

—『日経WOMAN』に88年の創刊時から携わっていらっしゃるんですが、これまでの20数年間で女性を取り巻く環境にもいろんな変化がありました。読者の意識の変化をどのように捉えられていますか。

80年代からバブルまでは、女性総合職が誕生しましたが、バブル崩壊とともに消えました。企業も女性の活用の仕方を知らなかったし、女性たちもその挫折感を持ち、フェードアウトする方が多かったですね。ITバブル期の05～07年は、読者の方に将来のビジョンを聞いても、明確でない場合が多かったのですが、リーマンショック以降はガラッと変わりました。『日経WOMAN』は読者の7割がシングルですが、自分の職場で派遣切りやリストラを目にして、危機感が高まりました。雇用は、自分の生存に直結する問題ですので、先の見えない不安に、このままではいけないと思い、好む好まざるに関わらず、働き続けなければいけないという現実的な意識が芽生えてきました。今は厳しい時代ですが、女性たちが一生働き続け、自分のキャリアをどう構築するかという意識が高まってきていると思います。この間、企業の意識もすごく変わってきました。グローバルで収益性が高い企業であるほど、組織で眠っている力、



ふもと さち こ
麗幸子さん
日経WOMAN 編集長

“アラサー”世代を中心に働く女性のバイブルとして絶大な人気を持つ情報誌『日経WOMAN』。編集長の麗幸子さん（第一学群人文学類、84年卒）に、学生時代の思い出や仕事上でのポリシー、働く女性の生き方に対する考えや男女参画の在り方などを、伺いました。

1962年 秋田県生まれ
1984年 筑波大学卒業、日経BP社入社
1988年 日経WOMAN創刊メンバーとなる。
1989年 長男出産、1991年長女出産
2006年 日経WOMAN編集長に就任
2009年 日経ウーマンオンライン編集長兼務。
筑波大学非常勤講師を務める。

リソースは女性だということに気づき、その力を生かすことに注力しています。社会で働く女性の6割以上が、出産までに職場を去っているのが実情ですが、今は、企業も女性活用に力を入れています。女性のキャリア気質の高まりと、企業側の意識の変化で良い時代が来るのではないかと感じています。

—『日経WOMAN』が働く女性に及ぼす影響は？

多くの方が『日経WOMAN』を読んで元気づけられたとか、人生が変わったと言って下さいます。ファッションや美容も大事ですが、どうやって働き続けたいのか、という問いのソリューションを提示したいと思っています。そして女性が生きやすくなる社会づくりに、一定の寄与したいと思っています。私はよく、3つの「不」を解消する雑誌と申し上げています。女性はビジネス社会で2割の少数派のため、上司が分かってくれないといった不満が出てくる。その「不満」に対して、ビジネスコミュニケーションスキルの提案を差し上げる。次に「不安」。間違った情報が流れる社会で、弊誌は、ある知見に基づく確かな情報を届けて不安を解消しています。そして「不在」です。まだ、女性の平均勤続年数は10年ですから、女性のロールモデルがいません。男性は、いろいろな先輩たちの、その姿を見てチューニングし、ロールモデルを構築しますが、女性にはそれがいないので、弊誌では、いろんな女性の姿を紹介しています。これらの「不」を解消する雑誌でありたいと願っています。

—編集長の仕事内容をお聞かせ下さい。

予算を持ち、雑誌を作る総責任者です。特集のラインアップを決めて、記者に担当を割り当て、原稿やビジュアル面などすべてをチェックします。大きな編集予算を預かっていますので、売り上げ目標も達成しなければいけません。雑誌は97年から右肩下がりの斜陽業界ですが、『日経WOMAN』はおかげさまで売り上げを伸ばし、現在(10.11月)の実売部数は、12万部を超えています。

—仕事と暮らしのバランスは取れていますか。

ワークライフバランス(WLB)は、仕事と生活の比率5:5が正しいと思っている方がいますが、私は違うと思っています。私のWLBは、出産する26歳までは9:1くらい。仕事が好きで、仕事を覚えるのに一生懸命でした。出産後、企画出版部門に異動になり、月刊締め切りに追われることがない分、5:5くらいになりました。今は8:2で仕事への比重が多いですが、充実しています。

—仕事を辞めようと思ったことはありますか。

それは一度もなかったですね。育休中に迎えた30歳の誕生日に、定年までの30年をどう過ごすか考えた時、



組織ですっと働き続けて、定年という地平を見てみようと思ったんです。ある時、自宅で仕事をしていると子供に、「お母さんは仕事をしているときが一番楽しそうだね」と言われたことがありました。やっぱり仕事が好きなのだと実感しましたね。会社には編集長をやらせていただけることに、感謝しております。

—編集長のモットーをお聞かせ下さい。

編集部の人間が、より良い記事を書けるような環境づくりと、雑誌を通して、女性が働きやすい社会をつくることに貢献したいということです。

—本学では男女共同参画推進室が設置され、本学で働く女性を支援しようという取り組みが始まりました。理想の進め方に、お考えはありますか。

進んでいる企業がどのように女性活用しているのかを、よく取材しますが、組織の意識改革が必要だと感じます。各階層へ、なぜ、男女共同参画が必要かを意識啓蒙しているのです。男女共同参画は筑波大学がグローバルに生き延びるために必要だということを、各階層へ植えつけることが重要です。それと、トップの本気度を示すことですね。トップ直轄の組織にして、メッセージを送ることが効果的だと思います。『2020年までに30%、指導的な女性を増やす』という国の目標に沿って、今のデータを確認しつつ、目標値達成のために課題が何なのかを分析する。女性たちが気づく仕組みを持つことも大切でしょう。自分たちで議論をし、課題策を見つけて実行することです。民間企業をリードするような男女共同参画の在り方を、筑波大学から示していただくと、OGとしてはとても誇りに思います。

—最後に筑波大学と後輩たちにメッセージをお願いします。

今の学生さんは、優秀なのにも関わらず、自尊心が低い世代だと思います。筑波大学で培った力は、世界をも通用すると思うので、自分の力を信じ、大きく羽ばたいてほしいです。そして、筑波大学の名をより高めてほしいですね。

リレー エッセイ

システム情報工学等支援室

荒井 陽子さん



ちょっと両生類・爬虫類ラブな私。みかん狩り中カエルを捕まえて喜ぶ。しっとりとした冷たい軟らかさ。ああ可愛い。血は争えないのか、娘はカナヘビの卵を育てるんだと家に持ち込んだ。どうすりゃいいのコレ！？色々調べると卵の上下や水分補給が大事とある。

上ってどっちっ！？

地道に卵を湿らせること二週間、無事に孵化して5cm程の赤ちゃんが現れ大興奮！人によく慣れ、つぶらな瞳を閉じて指の上で昼寝をする姿が愛らしかった。結局ひと月ほどで死なせてしまい、放してれば…と悔やみましたが、それを含めて忘れたい日々だった。春になれば今度はどんな出会いがあるかと、楽しみにしている。

次回は、附属坂戸高等学校教諭の深澤孝之さんです。
「教職員総出で頑張った法人化移行期、同世代で愚痴も言え、また励ましていただきました。工業科の先生です」

システム情報工学等支援室

川崎 由紀子さん



早春、文化系修士棟前にアシタバが芽吹く。第二食堂前のコブシがほころぶと桜は近い。GWには附属病院入口のトチノキがドサッと葉を広げ、グラウンド口の幅広の中央分離帯はサツキの絨毯。第三エリアでクチナシが香ると間もなく梅雨。ネジバナのピンク色が目立つ頃、図書館前の橋からはタイサンボクの花を見下ろせる。盛夏、グラウンド付近のケヤキ並木は緑のトンネル。秋、本部棟前駐車場ゲート付近にイガグリ落下。晩秋、中央口突き当たり(人間系学系棟手前)の大イチョウが目を引き。毎年、誰かがどこかにXmasの飾り付けをしている。今年も学内で「お気に入りの風景」が見られますように。。。

次回は、生命環境科学等技術室の古川理恵さんです。
「昔はテニス等と一緒に遊びましたが、今や彼女は、日本舞踊で何度も国立劇場の舞台に立つほどです」

附属視覚特別支援学校
副校長

星 祐子さん



「ただいま」と玄関を開けると、走り寄ってきて、しっぴをちぎれんばかりに振って出迎えてくれる、我が家の愛犬クロ。今から7年程前に息子の誕生日プレゼントに、夫が知人から譲り受けてきたミニチュアダックスフンド(といっても、ミニチュアとは名ばかり、かなりのジャンボサイズ)です。

黒いからという単純な理由で息子が命名したクロは、かなりの甘えん坊で、ゴロンと寝ころんでお腹を出して甘えてきます。家族4人の役割も勝手に決めているようで、夫には一応従い、娘にはベタベタ甘え、息子は遊び友達、そして私は食事係。家族で癒されています。

次回は、人間総合科学研究科教授 兼 特別支援教育研究センター教授 兼 附属桐が丘特別支援学校校長の安藤隆男さんです。
「一緒に仕事をさせていただいたセンターでは、覚悟をもって仕事に向かい合うことを教えていただきました」

生命環境科学研究科
生物機能科学専攻
講師

加香 孝一郎さん



今年で在つくば27年、4度目の年男。まだ桜村だった頃本学に入学して、卒業後工技院(現産総研)ポスドクを経て、1998(H10)年9月に本学に戻り現在に至ります。この間、科学万博につくば市誕生、TX開通にイーアスつくば…と、街は目まぐるしく発展してきました。学類の後輩だった家内は一昨年、それまで続けてきた保育士の仕事を辞め、今は趣味の編みぐるみを作りながら家を守ってくれています。来年高校受験の長男と小2の次男には、あまり父親らしいこともしてやれていませんが、将来は好きなことに向かって逞しく成長してくれたらと願っています。

次回は、生命環境科学等支援室の猿田真由美さんです。
「家のお隣さんで、ご夫妻とは10年のおつき合いになります。いつもウチのガキ共が騒いで申し訳ありません」

総務部情報化推進課
葛山 清光さん



Jリーグ発足の頃、子どもが地元の少年団でサッカーを始め、送迎のついでに見ているうちに、父親コーチとして一緒にサッカーを始めていました。もともと、運動することが好きなせいでしょうか、そのまま続けて、もう10年が過ぎようとしています。いまだにコーチとして携わっています。最近、自分でもシニアのチームに加わり、試合に出場するようになりました。体にもガタがきて、家族には「いい加減にすれば」と言われますが、このままもう少し続けていこうと思っています。皆さんも一緒にボールを追いませんか？

次回は、生命環境科学等支援室の金澤好實さんです。「採用の時から、仕事やスポーツなど、いろいろとお世話になっています」

体育芸術系支援室
飯岡 由美子さん



わが家に土鍋がやってきた。9月25日。まだ暑さが残る、メディアで“おもしろ鍋”の特集を始める以前から、鍋生活に漬かっている（夏は冷やうどん生活だった）。手抜きではない。ハマリ症なだけ。とりわけ、直径が土鍋サイズのハンバーグを投入したトマト鍋は圧巻だった。問題がひとつ、ハードワークがたたったか、要の土鍋が悲鳴をあげた。さて、どうするか。ところで、鍋をつつく傍らで思った事がある。本来「鍋」とは調理器具だが、土鍋で煮込んだ料理を指す言葉としても通じる。なぞだ。日本語だから？とふわふわ考えながら、鍋のお供に今夜もビールがうまい。

次回は、教育推進部学務課の上村和也さんです。「職場で会った事はなく、バドとバーで繋がっている不思議な間柄ですが、おもしろ人なので紹介します」

図書館情報メディア研究科
図書館情報メディア専攻
准教授
白井 哲哉さん



本学に着任する前、文学館という所で働いていた時、マンガ・アニメの企画展開催を準備しました。昔はともかく今の作品は不案内で、高校と中学の2人の息子に「『らき☆すた』って知ってる？」と尋ねたら、机や押し入れから続々と出てくるアニメグッズやコミックの数々……。毎月の小遣いが勉強に全く投下されていないことを思い知る一瞬でした。でも2人に教わった知識は、今では私の授業に生きています。アニソン『残酷な天使のテーゼ』の一節を歌って歴史を語ったり、『攻殻機動隊』を使ってデジタル社会を論じたりしながら、子どもたちへそっと感謝する日々です。

次回は人文社会科学部研究科 歴史・人類学専攻 講師の山澤学さんです。「若い頃からの研究仲間です。そのうち一緒に飲もうねと言いつつ、月日が経っていますが、今度こそよろしく」

附属小学校
教諭
盛山 隆雄さん



6年生の担任をしています。4年生から担任をしてきましたので、3年目のクラスです。振り返ると、日々の授業だけでなく、一緒に山に登ったり、海で泳いだりしたこと。劇を作ったり、運動会で燃えたりしたことなど、多くの感動が心に残っています。今は、教室にいて子どもたちと触れ合うことを、実に楽しいと感じています。授業をするのが楽しいし、給食や休み時間に子どもたちと言葉を交わすことも楽しい。「卒業」という声が聞こえ始めましたが、まだそんな寂しいことは考えずに、子どもたちとの貴重な毎日を大切に過ごしたいと思っています。

次回は、附属学校教育局学校支援課の川副靖子さんです。「数年前、附属小学校の事務室でお仕事をされていて、教え子も私もお世話になっていました」



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【茗溪会とは】 社団法人茗溪会(西野虎之介理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする公益法人で、1882年に設立しました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会のつば公開講座

茗溪会のつば公開講座「ブランドをつくるプロセス」が大学会館で9月25日、本学OBで現在、本学大学院講師(ビジュアルデザイン)の原忠信先生を講師に迎え開催されました。原講師は、アメリカで建築に関わるデザインの仕事をされてきた経験から、アメリカでの仕事や携わった大手飲料メーカーのペットボトルのパッケージデザイン制作の進め方、大分県津久見市で、みかんの売り出しに関わる地域ブランド開発の仕事から、地域の再発見のお話しなどを講演下さいました。10月18日には、

東京・茗溪会館でも同様の講演をしていただきました。11月6日には、筑波研修センターで藤原保明名誉教授の公開講座が開かれました。3回目となる今回は「単語はここが面白い」と題し、「英単語は、1000年以上もの激しい風雪に耐えて生き残った言葉のタイムカプセルだ」として、インド・ヨーロッパ基語から徐々に分化していった過程を、キリスト教伝来やノルマン征服の歴史を背景に、「歯:tooth」「座:sit」など個々の単語の変化を追いながら、日本語とも対照して、分かりやすく解説して下さいました。



藤原保明名誉教授



原忠信講師



熱心にメモを取る参加者の姿も(「ブランドをつくるプロセス」会場)

茗溪会顕彰に「ホスピタブル イン ホスピタル」

第9回茗溪会顕彰式と祝賀会が11月26日、東京・茗溪会館で行われました。本年度の顕彰は、全国から6団体と個人4人が選ばれ、その中で、筑波大学学生の活動「ホスピタブル イン ホスピタル」が顕彰されました。

筑波大学芸術学系の学生が中心となって作る病院アート・プロジェクトチームの3グループ「アスパラガス」「パブリカ」「フロンティアーズ」は、筑波メディカルセンターや筑波大学附属病院等で現場スタッフとの協力のもとに病院内の壁面や空間を利用してさまざまな展示活動を行っています。患者や病院スタッフの心を癒す活動は、多くの人々から感謝されています。(代表学生:岩田美里、小島麻夕子、谷尚樹、指導:蓮見孝教授)



茗溪会顕彰は、地域社会で広く社会に貢献している青少年や一般社会人を顕彰対象とし、茗溪会の公益事業として行われているもので、今年で9回目になります。



第15回茗溪・筑波グランドフェスティバル

日時: 2011年1月22日(土) 13:00～

会場: 筑波大学 大学会館

内容: シンポジウム

「宇宙利用の未来、新たな地球観形成へ
向けて」基調講演 逢坂卓郎教授(人間総合科学研究科)

懇親会「全学類・全世代交流会2011」

共催: 筑波大学／茗溪会

連絡先: MTGF実行委員会

TEL029-852-8572 E-mail info@mtgf.net



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【紫峰会とは】 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

■紫峰会報と発送作業

「紫峰会報」は、主な会員である学生の保護者の皆さまに、学生の日常生活等を伝える紫峰会の広報紙です。現在は年5回発行しています。この紫峰会報を会員にお届けするために、三系（文化系サークル連合会、芸術系サークル連合会、体育会）が主体となり、課外活動団体の全団体が一丸となって「発送作業」を行っています。各号1万通以上発送しており、年間約6万5,000通にも上ります。最近では「筑波大学新聞」を同封して会員に発送しており、大学の広報を行うという側面が強くなり、紫峰会報の重要性は更に大きなものとなっています。

■紫峰会報と発送作業

紫峰会報は、紫峰会が誕生して3年後の1980年10月1日に創刊されました。編集は紫峰会職員を中心に、三系の役員が協力して行っていました。会報の題字は高橋進副学長（当時）によるもので、一時期を除いて現在まで使われています。編集に協力する三系の担当役員は、徐々に広報局長に定着し、1988年「三系広報会議」が設置されました。現在は全学学類・専門学群代表者会議の担当者も加わり、「学生広報会議」として活動しています。

会報の内容は主に、筑波大学関連・課外活動団体・全代会のニュース、大学提供のコラム・就職情報等、そして学生が作る特集などです。ニュースと特集については、学生広報会議に参加している学生が団体に寄稿を依頼したり、カメラを持って取材に行ったりして記事を書いています。これまでに何度か紫峰会報の内容に関するアンケートを実施しました。その結果、保護者は、学生の日常生活と就職・進路についての情報を欲しいと思っていることが分かり、内容に反映させてきました。



歴代の三系の学生広報会議メンバー

■発送作業

会報創刊の頃、宛名は手で書いていて、長3封筒に会報を三つ折りにして封入していたため、発送作業は相当大変なものでした。その後、宛名ラベルをパソコンからプリントアウトしたり、長3封筒を角2封筒に変えて会報を折らなくしたり、封かんをセロハンテープからテープタックに変えたりするなどの工夫もあり、作業時間を大幅に短縮することができました。発送費用についても、つくば市内でも最大級の発送数ということで格安の契約を結ぶことができ、大幅に削減できています。



文化系サークル館での発送作業の様子

会員からのお手紙

一番ありがたいのは「学生相談室から」の記事を拝読する時、大変励まされ安堵することです。どうしてこんなに親心が分かってくださるのだろう。そして共感し、さらに進むべき道を示唆してくださることのありがたさにしみじみと、この大学へ進んだわが子の幸せを思います。いくら自分に言い聞かせ努力しても、独善に陥りやすい個の力です。このコーナーは、やさしく背中をなでられ励まされる思いです。今後ともどうぞよろしくご指導くださいませ。

子供を筑波大学に通わせて2年目になりました。実家から遠い土地、慣れない土地…。毎日が心配の日々でした。その中でも「紫峰会報」は貴重な学内の事を知る手立てであり届くのを楽しみにしておりました。この春から「筑波大学新聞」が一緒に届く事になったと知り嬉しく思い、また、こういう新聞があったのであればもっと早く見たかったと強く思っております。

※紫峰会報の創刊号からのバックナンバーは紫峰会WEBサイト (<http://www.shihoukai.gr.jp/>) にて公開しています。

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(10月～12月)

● 新聞記事一覧

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	世界選手権(柔道、野球)の本学生メダリストが山田学長に成果報告	山田信博学長 山崎まり(体専3年) 森下純平(体専2年) 秋本啓之(人間総合科学研究科2年) 西山大希(体専2年) 平岡拓晃(人間総合科学研究科1年) 粟野靖浩(体専4年) 緒方亜香里(体専2年)	茨城(10.1)朝日(10.2)常陽(10.3) 産経(10.16)
2	つくばセンター広場に「空飛ぶわら屋根」が登場 本学人間総合科学研究科の学生がデザイン	安藤邦廣教授(人間総合科学研究科) 人間総合科学研究科	朝日(10.3)常陽(10.3)
3	本学の学園祭「雙峰祭」が10/9に開幕 10/11まで		茨城(10.7)
4	本学で開かれた高大連携シンポジウムに鳩山由紀夫前首相が出席 高校生らの研究に助言		朝日(10.10)毎日(10.10) 読売(10.10)茨城(10.10) 常陽(10.10)日刊工業(10.13)
5	林純一教授が米科学誌に研究成果発表 ミトコンドリア変異で排除 iPS細胞でも拒絶反応か	林純一教授(生命環境科学研究科)	Web共同(10.11)
6	骨髄移植 抗体で合併症予防へ 本学研究グループがマウスを使った実験で成功	澁谷彰教授(人間総合科学研究科)	Web NHK(10.12)毎日(10.20)
7	本学所蔵の古書、江戸中後期の名僧・梵語学の大家、 慈雲の直筆と判明 10/4～10-29、附属図書館で公開へ	秋山学准教授(人文社会科学研究所)	茨城(10.18)
8	本学の研究グループが、子どもの見守りシステムの実証実験をスタート 園児に機器装着し実験	李昇姫准教授(人間総合科学研究科) 濱中雅俊講師(システム情報工学研究所)	毎日(10.18夕、10.19) 日経(10.19)日経産業(10.19)
9	本学研究チームが新型顕微鏡開発 「1000兆分の1秒」変化捕捉 半導体開発に貢献	重川秀実教授(数理工学研究所)	毎日(10.25)日刊工業(10.25)
10	本学と関東技研などが共同で、エックス線を使う頭部手術で、 患者の目を保護する装置を開発	盛武敬講師 (人間総合科学研究科、陽子線医学利用研究センター)	日経(10.27)
11	本学の岩田洋夫教授らが仮想体験装置を開発 ガラス越しでも触感再現 博物館や製品評価向け	岩田洋夫教授(システム情報工学研究所)	日経産業(10.28)
12	本学TARAセンターを改組 生命科学特化し学際研究	山田信博学長 江崎玲於奈元学長 浅島誠教授(TARAセンター長)	毎日(10.29)常陽(10.29) 茨城(10.30)産経(11.9)
13	▽スポーツ政策を考える:山口香准教授 育成は文武両道で	山口香准教授(人間総合科学研究科)	毎日(10.30)
14	本学などの研究チームが、県名産の干しイモから出る残りがすから バイオエタノール製造農家に還元、CO2削減へ	北村豊准教授(生命環境科学研究科)	朝日(11.1)
15	小海高校(南佐久郡小海町)の生徒が学問や進路、本学院生と語り合う 本学大学院との交流10年目	伊藤純郎教授(人文社会科学研究所)	信濃毎日(11.2)
16	本学生らが里山アート 間伐後に球体「ししやぐら」を制作	安藤邦廣教授(人間総合科学研究科) 芸術専門学群 アートデザインプロデュース(ADP) 畠和宏(人間総合科学研究科) 坂本理恵(芸専1年)	毎日(11.6)常陽(11.7)茨城(11.10)
17	本年度の茨城県表彰・特別功労賞に山海嘉之教授	山海嘉之教授(システム情報工学研究所)	常陽(11.6)産経(11.7、11.13) 茨城(11.7、11.13)常陽(11.13)
18	茨城県立中央病院婦人科医3人増へ 来年3月、がん治療拠点に地域医療で本学と連携		東京(11.9)読売(11.9)
19	▽フロンティア 世界を貫ける研究者①:柳沢正史教授 眠りの謎解きに挑む	柳沢正史教授(人間総合科学研究科)	毎日(11.9)
20	本学が廃棄物の溶融炉に2000度超に耐える材料開発 商品化を目指し協力企業求める	杉浦則夫教授(生命環境科学研究科)	日経(11.10)日経産業(11.17)
21	▽ニホンを元気にする研究:渡邊信教授の目標 藻類の石油で自給率アップ	渡邊信教授(生命環境科学研究科)	読売(11.11夕)
22	広州アジア大会・柔道 本学勢が大活躍	杉本美香(OG、コマツ) 緒方亜香里(体専2年) 小野卓志(人間総合科学研究科2年) 高松正裕(OG、桐蔭学園高教諭) 秋本啓之(人間総合科学研究科2年) 森下純平(体専2年) 平岡拓晃(人間総合科学研究科1年) 福見友子(OG、了徳寺学園)	朝日(11.14～17)毎日(11.14～17) 読売(11.14～17)産経(11.14～17) 茨城(11.14～17)東京(11.15夕～17) 日経(11.15夕～17)
23	仕分け対象のグローバル30 本学など13大学が事業強化要望	塩尻和子副学長	茨城(11.17)日経(11.17)
24	知能ロボットの公道実験「つくばチャレンジ2010」に32チームが参加 難路にくじけず7台完走	油田信一教授(システム情報工学研究所)	朝日(11.19)毎日(11.19)産経(11.19) 日経(11.20)日刊工業(11.26)
25	つくば市旧春日庁舎、筑波大が研究室や日本語教室に利用 来年1月からは保育所も開設		茨城(11.20)毎日(11.30)
26	本学など11大学が仕分けで緊急提言	山田信博学長	NHKWeb(11.25)毎日(11.26) 日刊工業(11.26)日経産業(11.26)
27	▽茨城論壇:山田信博学長 「信頼とチームワーク」	山田信博学長	茨城(11.27)
28	本学構内を発着に第30回つくばマラソン 過去最多の1万4869人が疾走	三輪模(医学群5年) 加倉井佑一(病院総務部)	読売(11.29)常陽(11.29)
29	茨城県北の医師確保へ 本学と日製が地域医療拠点で連携 来年4月、ひたちなかに5人派遣	山田信博学長 筑波大学附属病院 筑波大学附属病院ひたちなか総合病院ひたちなか社会連携 教育研究センター(※仮称)	朝日(12.1)日経(12.1)東京(12.1) 茨城(12.1、12.8)常陽(12.1) 日刊工業(12.14)
30	産学連携のセンター開所 臨床検査や教育研究支援 本格稼働は2011年1月	五十嵐徹也附属病院長	日経(12.4)茨城(12.4)常陽(12.7)

● テレビ放送一覧

	内 容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	「新型(未熟型)うつ」が最近増えており、企業対応の困難さを紹介	松崎一葉教授 (人間総合科学研究科 生命システム医学専攻、保健衛生外来グループ長)	NHK総合:おはよう日本(10.14)
2	大学進学を目指す盲ろう者を通じ、盲ろう教育の課題を見つめる	森敦史(附属視覚特別支援学校高等部3年)	NHK教育:福祉ネットワーク シリーズ盲ろう教育(11.8)

イベントカレンダー (1月～3月)

1月

- 4日(火) 仕事始め 学長年頭挨拶
- 7日(金) 理療科教員養成施設一般入試
(一次試験)
- 14日(金) 筑波大学産学連携会総会
- 15日(土) 大学入試センター試験(～16日)
- 22日(土) 茗溪・筑波グランドフェスティバル
- 25日(火) 第48回バイオeカフェ
- 30日(日) 伊豆海洋自然塾公開講座
『ウミガメを知らう!』



2月

- 1日(火) 大学院入試「2月期」(～3日)
関東・甲信越地区及び
東京地区実践セミナー(産学連携の部)
理療科教員養成施設一般入試
(二次試験)(～2日)
- 3日(木) 菅平高原実験センターオープンデー
(大明神の滝ツアー)
附属桐が丘特別支援学校研究協議会
(～4日)
- 5日(土) 菅平高原実験センターオープンデー
(大明神の滝ツアー)
- 6日(日) ビジネス科学研究科企業法学専攻・
企業科学専攻入学試験(2次募集)
- 8日(火) つくば産学連携促進市 in アキバ
- 9日(水) 附属久里浜特別支援学校
実践研究協議会(～10日)
- 15日(火) 第49回バイオeカフェ
- 17日(木) 附属小学校初等教育研修会(～18日)
第10回筑波大学技術職員技術発表会
- 18日(金) 附属大塚特別支援学校研究協議会
- 19日(土) 電腦下田黒船学校
『サメの体を調べよう!』
附属視覚特別支援学校研究協議会
(～20日)
- 25日(金) 前期日程試験
附属坂戸高等学校総合学科研究大会
附属聴覚特別支援学校聴覚障害
早期教育公開研修会
- 26日(土) 前期日程試験
附属学校春期研修会
附属学校教育局研究発表会



3月

- 1日(火) 第3学期授業終了
附属駒場高等学校卒業式
- 5日(土) 電腦下田黒船学校
『ワカメのひみつを調べよう!』
ビジネス科学研究科
国際経営プロフェッショナル専攻入学試験
(～6日)
- 6日(日) 合格発表「前期/私費/編入(社)」
- 11日(金) 附属坂戸高等学校卒業式
- 12日(土) 後期日程試験
- 15日(火) 附属視覚特別支援学校卒業式
附属聴覚特別支援学校卒業式
- 16日(水) 附属中学校卒業式
附属大塚特別支援学校卒業式
- 17日(木) 附属桐が丘特別支援学校卒業式
- 18日(金) 附属高等学校卒業式
- 20日(日) 合格発表「後期」
- 23日(水) 附属小学校卒業式
附属駒場中学校卒業式
附属久里浜特別支援学校卒業式
- 25日(金) 卒業式 大学院学位記授与式
- 26日(土) 東京キャンパス大学院学位記授与式
- 31日(木) 退職時永年勤続者表彰式





「本部棟」

低層棟（地上4階、1976年6月竣工）と高層棟（地上8階、1977年9月竣工）からなり、本学の中地区に位置しています。現在、学長室や副学長室のほか、総務部、財務部、国際部、教育推進部、研究推進部、監査室、企画室、広報室、基金事業室などの管理機能を中心に構成されています。



Tsukuba
Communications

